

2025 年度 入学試験問題

国 語

(第 2 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、
解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、本文には一部省略した部分があります。

社会学者の鈴木謙介は、「ウェブ社会」の特徴を「^①現実空間の多孔化」と呼び優れたユニークな分析をしています(鈴木謙介『ウェブ社会のゆくえ——〈多孔化〉した現実のなかで』NHKブックス、二〇一三年)。

「現実空間の多孔化」とはどのようなことを言っているのでしょうか。鈴木は「現実の空間に付随する意味の空間に無数の穴が開き、他の場所から意味Ⅱ情報が流入したり、逆に情報が流出したりする」ことを「空間的現実の多孔化」と呼び、「多孔化した現実空間においては、同じ空間に存在している人どうしが互いに別の意味へと接続されるため物理的空間の特権性が失われる」ことを「^②空間的現実の非特権化」と呼んでいます。

二〇一六年七月に日本でも「Pokemon GO」が解禁され、日本中の人々がゲームにはまっています。あらゆる場所にポケモンが出現するため、さまざまなトラブルや事件も起こっています。たとえば広島市平和記念公園をポケモンの出現する場所から外してほしいという要請がなされました。原爆の子の像のまわりにスマホをかざした多くの人々が集まっている映像がテレビで流されていました。以前に比べ圧倒的に大勢の人々が原爆の子の像を見ているのです。しかし、彼ら^③は原爆の子の像が本来持っている「意味」を見ていません。

こうした現象は、まさに鈴木という「空間的現実の非特権化」と言えるでしょう。それではなぜ広島市はこうした要請をしたのでしょうか。確かに多くの人々が平和記念公園に来ていることは事実です。しかし彼らにとって、この公園は、原爆が投下された広島についてや、ヒロシマの被爆という歴史的事実を考え、思いをはせる場所ではなく、ゲットしたいさまざまなポケモンが出現する魅力ある場所なのです。ゲームに熱中したい人々にとって、被爆を考えることは、ゲームを進めるうえで意味のないことです。彼らにとって、公園内を自由に動き回れ、より多くのポケモンをゲットできることが、なによりも重要なリアルさなのです。

つまり被爆の現実に触れ、その不条理や悲惨を学び、反核・平和へ思いをはせるという平和記念公園がもつ「意味」の「特権性」が、ゲームの仮想的な空間や現実^④に侵略され、その意味を喪失する危険にさらされているのです。確かに被爆をめぐる慰霊碑や痕跡は広島にとって重要な観光資源です。しかし被爆七〇年がすぎ、被爆の記憶をいかに継承していけるのかという深い課題を前にして、観光資源でありながらも被爆の歴史を反省し得る「特権性」を、それらがいかに維持し新たに創造できるかは、広島市など地元が真剣に模索している重要なテーマなのです。それなのに、あまりにも素朴かつお気楽な形で、その「特権性」が脅かされたからこそ、Pokemon GOは平和記念公園において、問題となったのです。

ところで鈴木がいう「多孔化した現実空間」は、まさにそのとおりだと思うのですが、私は別の意味で、スマホは、私たちの日常に新たに、大きく深くまさに「底知れない」、とんでもない「穴」をあけてしまったのではと考えています。

あたかも身体の一部と化したかのようなスマホ(Ⅱ「穴」)を通して、毎日毎時間、そして毎秒、圧倒的な質と量の情報が、私たちになだれ込んできます。そのなかには、歴史の事実を踏まえない虚偽の情報で特定の民族への嫌悪を煽り立てる悪意に満ちた情報もありますし、また私たちの欲望を見透かしたような「うまい話」もあります。もちろん現代社会、国際関係、国家、市民社会のありようを考えるうえで有用で時宜を得た情報も「穴」から入ってきます。玉石混交の情報、つまり私たちが日常を気持ちよく生きていくうえで必要なものもまったく不要なものも含めてあらゆる質の情報が「穴」から私たちの日常へ、これでもかと侵入してくるのです。

もちろん、こうした事態はインターネットやスマホが社会に登場する以前から私たちを襲っていたものです。だからとりたてて新しい問題だと主張する必要はないかもしれません。しかし以前と比べ確実に異なっているのは、そうした情報が私たちにとって「意味あるもの」として認識され、その意味を私たちが反芻し、自分にとって有用か否かを判断するために与えられた「時間」が限られ、いわば瞬時のうちに情報の質を判断する「技量」が求められてきているという点です。

確かに、あらゆる情報を瞬時のうちに確認したり手に入れたりできることは、すごいことかもしれません。しかしスマホを身体の一部にしていながらも、私たちは「穴」という「穴」から入ってくる情報の真偽や背景、根拠などの「意味」を同じく瞬時のうちに判断し、情報を取捨選択できる力と技量を備えているのでしょうか。またそうした力と技量が私たちのなかで育ってきているのでしょうか。言い換えれば、玉石混交の情報の襲撃に対して、うろたえることなく冷静に向きあうことができるような情報への「耐性」を私たちは、いま十分に身につけてきているのでしょうか。

本章の冒頭に、私たちはいまスマホに「飼い慣らされて」いると書きました。これは私の実感から出てきた表現なのですが、^⑤ スマホを飼い慣らすのではなく、スマホに飼い慣らされているとすれば、まさに、それこそ、情報への「耐性」を身につけておらず、スマホからあふれ出る情報に翻弄されている私たちの現在の姿ではないでしょうか。

では、いかにしたら、情報への「耐性」を考え、自分なりに身につけていくことができるのでしょうか。

終日スマホとつきあうなかで、とりたてて目的もなく、ただ退屈をまぎらせるためにだけスマホに指を滑らせている自分の姿をいま一度確認してみてください。必要のない時間はスマホを切り、本を読んだり、別の営みをして、自らの情報をめぐりテラシー(情報の質や意味を的確に判断できる能力)を高めていく、あるいはスマホを切り、いったん情報への依存を停止したうえで、自分の頭で、それまで自分が得てきた A な知だけを手がかりにして、いろいろなことに

について思索する余裕を持つようにする、等々情報への「耐性」を養う試みは思い浮かびます。まずは、本書を読んでいるあなた自身がスマホからいったん距離をとって、日常生活をしている自分の姿を考え直すことが第一なのです。

今一つ、考えるべき重要な問題は、スマホという「穴」から自分自身のプライベートな領域が際限なく拡散していくことであり、それに伴うプライベートな領域が被るリスクや侵害をどう考えるべきかということです。

情報をめぐるリテラシーが、「穴」から入ってくる情報と私たちがいかに向き合うかを考える問題でした。これに対して、プライベートな領域の際限なき拡散と領域が被るリスクと侵害は、私たちが「穴」からどうしようもなく自分の情報が漏れ出していくことをどう考え、どう対処するのか、また自分の情報を外の世界に向けてどのように放出していくのかを考えるという次元の問題といえます。

「私は自分が好きな写真を(インスタグラムに)」あげてただけです。それをみなさんが気に入ってくれたことがとてもうれし、ありがたいです」

五〇〇万近くのパロワーをもつインスタグラムの女王とされるタレントが先日テレビでこう語っていました。自分自身を被写体とした「好きな写真」をインスタグラムにあげ続けたと。それを見て楽しむのは、パロワーの自由であつて、私が与り知らないところだと。私はこのコメントを聞きながら、いろいろと考えていました。

もちろんタレントでありテレビなどで仕事をする以上、自分自身が多くの人々にどのように受け入れられ評価されるのが大切だろう。だから自分の写真に対する批判や否定的な評価へのコメントはしないだろう。コメント自体がさらなるタレントへの評価の源となることをよく知っている、したたかな姿だなと感じ入っていたのです。

しかし同時に、プライベートな領域をめぐる捉え方に驚いてもいたのです。自分の普段の姿を映像にとり、インスタグラムにあげ続けるとき、自分の私秘的な(私的でできれば秘密にしておきたい)世界や領域はどのように保たれているのだろうか。それは、スマホという「穴」からBに自分の私的な姿を流出させる営みであり、いわば「穴」からプライベートな領域の中身は漏れ続け、外のより広い世界へ際限なく拡散し続ける営みと言えるのです。そうしたとき、自分自身をめぐる情報は、たとえば際限なく膨張し続ける風船のなかにあるようなもので、私秘性を保つ「膜」はどんどん薄く、破れやすいものとなり、破れてしまえば、自分自身をめぐる剥き出しの情報が、悪意や嫉妬などさまざまな情緒に満ちた匿名の権力のもとにさらされる危険性が生じてしまうのです。

もちろん先にあげたタレントにとつての「膜」は限りなく薄くなる危険性はあるものの、決して破れることがない丈夫さやしなやかさを備えているのかもしれない。いったい彼女はどのようなにして「膜」を鍛えあげていったのだろうか。さまざまに「膜」を脅かす危険と出会い、向きあうなかで、どのようにして破れないしなやかさが創造されていったのでしょうか。私は、そ

のことがとても気になります。そしてこれは、スマホと私たちの日常やスマホと私たちという存在との関係性を考えていくうえで、Cな問いといえるのです。

おそらく、先にあげたタレントは、その答えを教えてくださいることではないでしょう。また仮に「こうすればいい」と教えられるとしても、その答えは私たちすべてにあてはまる一般的なDなものでもないでしょう。結局のところ、スマホが私たち一人一人異なる身体の一部と化してしまっている以上、私たち各々が自分にとっての「スマホのある日常」を、危機感をもって詳細に見直し、それを変革していかざるをえないのです。

(好井裕明『今、ここ』から考える社会学』より)

問1 空らんA Dにあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つずつ

選び、それぞれ番号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----------------------|---|-------------------------|---|----------------------|
| 1 | 意図的 | 2 | 根本的 | 3 | 実践的 | 4 | 抽象的 | 5 | 普遍的 |
| | | | | | <small>じっせんてき</small> | | <small>ちゅうしょうてき</small> | | <small>ふへんてき</small> |

問2 本文を三つの大きなまとまりに分けた場合、三つめのまとまりはどこから始まりますか。

文中からはじめの五字をぬき出しなさい。

問3 ———線①「現実空間の多孔化」について、筆者は社会学者の鈴木謙介の分析をどのように

利用して論を進めていますか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 鈴木氏の分析に一定の評価をしつつも、部分的には否定的立場をとっている。
- 2 鈴木氏の分析に一定の評価をしつつも、第三の視点での意見を追加している。
- 3 鈴木氏の分析を手がかりにして、現実的な意味の空間に論点をしぼっている。
- 4 鈴木氏の分析を手がかりにして、日常に起こる別の問題点を引き出している。

問 4 ——— 線②「空間的現実の非特権化」の具体例として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 駅前のレストランの料理がインターネットで評判となり、撮影^{さつえい}だけを目的とした客が多く来店するようになり、常連客が食事を楽しめなくなってしまった。
- 2 社会科の授業でタブレットを使ってイギリスについて調べていたところ、すっかり現地を旅行している気分になり、課題のことをすっかり忘れてしまった。
- 3 自宅で夕食をとったあと家族それぞれがくつろいで雑談していたところ、自分だけが友だちとのチャットに夢中だったため、話題に取り残されてしまった。
- 4 学校帰りに仲のよい数人で近くのファーストフード店に立ち寄って飲食を楽しんでいたところ、先生が店内に入ってから、やんわり注意されてしまった。

問 5 ——— 線③「原爆の子の像が本来持っている『意味』」とありますが、それはどのような意味ですか。「～という意味。」につながるように文中から三十三字でぬき出し、はじめの五字を答えなさい。

問 6 ——— 線④「『穴』をあけてしまった」とありますが、筆者が考える「穴」についての説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 スマホが社会で広く使われるようになる以前は、私たちの日常生活に「穴」が開くということはなかった。
- 2 「穴」から入ってくる情報は有用なものをふくむが、意味のないものや有害なものほうが圧倒的に多い。
- 3 プライベートな領域が際限なく拡散することを防ぐためには、「穴」を強くするように鍛える必要がある。
- 4 「穴」から情報が入ってくる問題と出ていく問題は別次元のものだが、向き合うべき課題は共通している。

問7 ――線⑤「スマホを飼い慣らす」とありますが、そのために筆者が最も強く主張している行動例としてふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 スマホからあふれ出てくる多くの情報の中から、私たちにとって有用なものか否かを瞬時に判断する能力を^{かくとく}獲得する。

2 スマホの情報だけでものごとを判断するのではなく、本による知識や自分の経験もあわせて考える習慣を身につける。

3 スマホを目的もなく退屈まぎれのために使うことをやめ、有用で無害な情報を手に入れる時にだけスマホを使用する。

4 スマホから情報を得るのを断念したうえで、スマホが身体の一部となって余裕をなくしている自分の日常を考え直す。

問8 ――線⑥「プライベートな領域が被るリスクや侵害」について具体的にのべた部分を五十九字でぬき出し、はじめと終わりの五字で答えなさい。

問9 この文章を読んだとしお君は、本文を参考にスマホを利用する時の注意点を次のようにまとめました。空らん X Z に入ることばをXは四字、Yは五字、Zは三字で文中からぬき出し、文を完成させなさい。

- ・目的もなくただスマホを使いつづけることをやめ、時には電源を切るようにする。
- ・スマホゲームをする時は、そこがゲームをするのにふさわしい場かどうか考える。
- ・スマホの情報は X であることを理解し、危険なものや不正確なものを見ぬく。
- ・本を読んだり自分でものごとを考えたりして、情報の Y を高める努力をする。
- ・SNSに自分の情報をあげると、自分の Z な領域が^{おか}侵される危険性が生じる。

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

文芸雑誌の新人賞を受賞した「ぼく」は記者の質問をきっかけに、地元にあるミツザワ書店とその店主の老婆のことを思い出す。十六歳の頃、一冊の本に魅了されるあまり人生で唯一万引きをしてしまったのがミツザワ書店であった。受賞した翌年の正月、二作目の執筆に行き詰まる中久しぶりに地元に帰省した「ぼく」は、実家を抜け出してミツザワ書店へと向かう。以下はそれに続く場面である。

新しい年になって三日目、朝から続々と親戚が詰めかける実家を抜け出して、ぼくはミツザワ書店に向かった。財布には盗んだ本の代金を入れ、手にした茶封筒には自分の本を入れて。

十六歳のあの日以来避け続けていたから、ミツザワ書店のある商店街を歩くのは十一年ぶりだった。実家の近辺もそうだが、あのころと比べて商店街もずいぶん様変わりした。新築マンションが増え、商店街も少しは盛り返したのか、まだ三が日だというのに閉まっているシャッターは少ない。貸しビデオ屋もコンビニエンスストアもファミリーレストランもある。チェーンの居酒屋も、ゲームショップもあった。かといって、にぎわっているかと言えばそうでもなく、なぜかがらんとした雰囲気は変わらず漂っている。

正月の空は高く、澄んでいる。子どもたちが薄い影を引きずりながら、ゲームショップに駆けこんでいく。煎餅屋は携帯ショップに変わっていた。肉屋は以前と同じ位置にあったが閉まっていた。

ミツザワ書店が近づくに連れどきどきしてくる。シャッターがあいかわらず閉まっているまごころ洋裁店を過ぎ、ハートクリーニングを過ぎ、店先にがちゃがちゃを並べた駄菓子屋を過ぎ、やがてミツザワ書店の看板が見えてくる。すすけて色あせた、黄色地に赤い文字。ああ、あった。なくなっていなかった。【1】

以前とまったく同じ場所にあるミツザワ書店は、シャッターが閉まっていた。そういえば、シャッターの閉ざされたミツザワ書店をぼくは見たことがなかった。ほとんど眠ったような商店街だったが、ミツザワ書店はいつだつて開いていたのだ。

三が日だからか。明日には開店するのか。黒ずんだシャッターの前に立ち、ぼくは考えを巡らせる。着物姿の女の子たちがぼくの背後を通りすぎていく。彼女たちの手にした破魔矢の鈴が、ちりちりと鳴る。

東京に帰るのは明日の午後だから、明日の朝にまたきてみようか、そう思う一方で、^① 今帰つたらもう二度とここへくる気にはなれないような気もした。

ずいぶん長いあいだぼくはそこに立ち尽くしていたが、思いきつて店の裏側にまわった。店の裏側が住居になっていることは前から知っていた。店の裏手の門についたインターホンを鳴らしてみる。十歳かそこらのころ、住宅街をピンポンダッシュして走りまわったような高揚と緊張を覚える。

返答はない。もう一度押す。門の内側の申し訳程度の庭を、かつてミツザワ書店の店内を眺めたように見渡した。実際庭はちいさな書店内と同じく、雑然としていた。雑草が生い茂り、白いちいさな花が咲き、細いぐみの木や、背の高い柿の木が好き勝手にのびていた。

ドアがゆつくりと開き、ぼくはあわてて視線を戻す。てっきりあのおばあさんがあらわれると思っていたのだが、ドアから顔をのぞかせているのはずいぶん若い女の人だった。怪訝そうな目でぼくを見ている。

「あ、あの、以前こちらでよく買いものをしていた者なんです」ぼくは急いで自己紹介をした。「ひさしぶりに帰ってきたので寄ってみましたですが、閉まっていたので」

それを聞くと女の人は、口元にゆつたりした笑みを浮かべ、ドアから出てきて門を開いた。どうぞ、と手招きをする。

「いえ、あの、すみません、新年にご迷惑かと思っただけですけど、明日帰ってしまうもので」
「どうぞ、おあがりになって」

女の人はぼくに笑いかけた。背を丸めて本を読んでいたおばあさんが笑ったところは見たことがないけれど、笑いかけられ、この人がおばあさんの娘か孫だということがすぐにわかった。どこかなつかしいその笑顔に誘われるように、ぼくは玄関へ続く庭へと足を踏み出していった。【2】

こぢんまりとした居間に通され、ぼくはソファに腰掛けた。ミツザワ書店とは違い、こざつぱりした部屋だった。陽のさしこむ窓に目をやると、埃がゆつくり舞うのがやけにはつきり見えた。女の人は盆に紅茶をのせて、ぼくの向かいに腰掛ける。

「突然すみません」

ももごもごぼくは言った。女の人はぼくの前に紅茶を置く。香ばしいにおいがたちのぼる。

「あの、えーと、おばあさんはお元気ですか」

女の人は口元に笑みを浮かべたままぼくを見て、

「他界しました。去年の春です」静かな口調で言った。頬をはられたような気持ちでぼくは女の人を見た。そういえば、玄関になんの飾りもなかったことを今さらながら思い出す。

「家の者は友人の家にいついて、ちようど今日は留守で、私もひまだったんですよ」

「えーと、あなたは、おばあさんの」

「孫です。三年前にここに引っ越してきて、この家で両親と暮らしています」

「それであの、ミツザワ書店は」

「祖母が伏せってから、ずっと閉めています。あとを継ぎたいという者がだれもいなくて。もともと儲かるような店じゃなかったし、祖母の道楽みたいなものでしたしね。今は駅の向こうに大型書店もできて、うちが店じまいしてもみなさん困ることもないでしょう」

③何か、とてつもない失敗をしでかしたような気になった。自分は凶悪事件の加害者で、警察にいかず被害者の家に自首しにきたような。柱時計の秒針が、やけに大きく耳に響いた。

「じつはお詫^わびしなきゃならないことがあつて今日はここまできたんです」

ぼくはうつむいたまま一気にしゃべった。十六歳の夏の日。秋のはじめの決行。はじめて本読みで夜を明かしたこと。拙^{つたな}い感想。三年前書きはじめた原稿^{げんこう}。幾度^{いくど}も書きなおした言葉。とんでもないことになったと思つた授賞式。夜襲^{おそ}いかかってくる不安。単行本と、それを手にして思ひ出したおばあさんのこと。

「本当にすみませんでした」

ぼくは財布から本の代金を取り出してソファテーブルに置き、深く頭を下げた。呆^{あき}れられるか、ののしられるか、帰れと言われるか、じつと待っていると、子どものような笑い声が聞こえてきた。驚^{おどろ}いて顔を上げると、女の人は腰をおりまげて笑つていた。ひとしきり笑つたあとで、話し出した。

「じつはね、あなただけじゃないの。この町に住んでいた子どもの何人かは、うちから本を持つてつてると思うわよ。祖母の具合が悪くなつて、それで私たち、同居するために引っ越してきたんだけど、はじめてあの店を見て、私だつて驚いちゃつた。持つてけ泥棒^{どろぼう}つて言つているような本屋じゃない。しかも祖母はずうつと本を読んでるし。私も幾度か店番をしたことがあつて、何人か、つかまえたのよ、本泥棒」女の人はまた笑い出した。「それだけじゃないの。返しにくる人も見つけたことあるの。持つていったものの、読み終えて 氣^いがとがめて、返しにきたんでしょうね。まつたく、図書館じゃあるまいし。こうしてお金を持つて訪ねてきてくれた人も、あなただけじゃないの。祖母が生きているあいだも、何人かいたわ。じつは数年前、これこれこういう本を盗んでしまった、つて。もちろん、そんな人ばかりじゃないだろうけどね、そんな人がいたのもたしかよ。あなたみたいにね」それから女の人はふとぼくを見て、

「作家になった人というのははじめてだけれど」と思いついたようにつけ足した。

「本当にすみません」もう一度頭を下げると、

「見ますか、ミツザワ書店」女の人は立ち上がつて手招きをした。

玄関から続く廊下^{ろうか}の突き当たりが、店と続いているらしかった。女の人は塗装^{とそう}の剥^はげた木製のドアを開け、明かりをつける。

本の持つ独特のにおい、紙とインクの埃^{あま}っぽいような、甘い菓子^{かし}のようなにおいがぼくを包みこみ、目の前に、あのなつかしいミツザワ書店がそのまま立ちあらわれる。【3】

「店は閉めているけれど、そのままにしているんです。片づけるのも処分するのも面倒^{めんどう}だというのが本音ですけど。ほとんど倉庫ですわね」

女の人とともに、店内に足を踏み入^{ふみ}れた。床から積み上げられた本、平台に無造作に積まれた本、レジ台で壁^{かべ}を作る本、棚^{たな}にぎゅうぎゅうに押しこまれた本——。記憶^{きおく}と異なるのは光だけだった。ガラス戸から黄色っぽい光がさしこんでいた薄暗^{うすぐら}いミツザワ書店は、今、蛍光灯^{けいこうとう}ののっぺりした明かりに照らし出されている。

「祖母は本当に本を読むのが好きな人でね。お正月なんかに集まっても、ひとりで本を読ん

したよ、子どもみたいに。読む本のジャンルもばらばら。ミステリーのこともあるれば、時代小説のこともあったし、あるとき私がのぞきこんだら、UFOは本当に存在するか、なんて本を読んでいたこともあった。祖母が祖父と結婚した理由っていうのも、祖父が本屋の跡取り息子だったからなんですって。祖父が亡くなってからは、自分の読みたい本ばかり注文して、片っ端から読んで。売り物なのにね」

女の人は積み上げられた本の表紙を、そつと撫でさすりながら言葉をつなぐ。

「私、子どものころおばあちゃんに訊いたことがあるの。本のどこがそんなにおもしろいの、って。おばあちゃん、何を訊いてるんだって顔で私を見て、『だってあんた、開くだけでどこへでも連れてってくれるものなんか、本しかないだろう』って言うんです。この町で生まれて、東京へも外国へもいったことがない、そんな祖母にとって、本っていうのは、世界への扉だったのかもしれないですよ」

それを言うなら子どものころのぼくにとつて、ミツザワ書店こそ世界への扉だったとぼくは思っていたけれど、口には出さなかった。そのかわり、棚を見るふりをして通路を歩き、茶封筒から自分の単行本をすばやく抜き取り、塔になった本の一番上にそつと置いた。

「おばあちゃんは本屋じゃなくて図書館で働くべきだったわね」

「でも、それじゃ、すぐクビになっちゃいますよ。仕事を放り出して本を読み耽っちゃうんだから」思わず言うと、女の人はまた楽しそうに笑った。

本で満たされた店内をぼくはもう一度眺めまわす。埃をかぶった本は、すべて呼吸をしているように思えた。ひっそりと、時間を吸いこみ、吐き出し、だれかに読まれるのをじっと待っているかのように。そのなかに混じったぼくの本は、いかにも新参者という風情で、居心地悪そうだった。しかし幸福そうでもあった。作家という不釣り合いな仕事を始めたばかりのぼくのように。

礼を言って玄関を出た。門まで見送りにきた女の人は、恥ずかしそうにうつむいて、

「いつかあそこを開放したいと思っています」とちいさな声で言った。「図書館なんておこがましいけれど、この町の人が読みたい本を好き勝手に持って行って、気が向いたら返してくれるような、そういう場所を作れたらいいなって思っているんですよ」【4】

「そうやってほしいと、じつはさっき思っていたんです。楽しみにしています」ぼくは言った。

「今日はどうもありがとうございました」女の人は頭を下げる。

「いえ、こちらこそありがとうございました」

「そうじゃなくて。本、お買いあげいただいて」

女の人はおかしそうに笑った。ついさっきぼくが出した本の代金のことを言っているのだと、わかるのに数秒かかった。すみませんと頭を下げて、ぼくも笑った。

シャッターの閉まったミツザワ書店の前を過ぎる。高く晴れた空の下、ひっそりとした商店街を歩く。数十メートル歩いてふりむくと、記憶のなかのミツザワ書店が色鮮やかに思い浮かんだ。

店の前に並べられた週刊誌や漫画^{まんが}、埃で曇^{くも}った窓ガラス。それはそのまま、未来の光景でもあるんだろう。^⑤ 世界に通じるちいさな扉は、近々きつと開くのだろうか。

不釣り合いでも、煮詰^{にっ}まつても、自分の言葉に絶望しても、それでもぼくは小説を書く、ミツザワ書店の棚の一部を占^しめるくらいの小説を書こうと、^⑥ 書き初^はめに向かう子どものような気分^そで思う。

顔を上げると、青い空に風^たがひとつ浮かんでいた。

(角田光代「ミツザワ書店」より)

問1 ――線ア「怪訝^{けげん}そうな」、イ「気がとがめて」、ウ「おこがましい」の文中での意味として

最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

ア「怪訝^{けげん}そうな」

- | | | | |
|---|-------------------------|---|-------------------------|
| 1 | 身構 ^{みくま} えるような | 2 | こわがるような |
| 3 | 不思議に思うような | 4 | ひどく驚 ^{おど} くような |

イ「気がとがめて」

- | | | | |
|---|----------|---|-----------|
| 1 | 気分が悪くなつて | 2 | ふと思いついて |
| 3 | われに返つて | 4 | 後ろめたさを感じて |

ウ「おこがましい」

- | | | | |
|---|-----------------------|---|-----------------------------------|
| 1 | なまいきだ | 2 | 壮 ^{そう} 大 ^{だい} だ |
| 3 | 叱 ^{しか} られそうだ | 4 | むだだ |

問2 次の文はもともと文中にあったものです。戻すのに最もふさわしい場所を【1】～【4】から選び、番号で答えなさい。

自分でも驚^{おど}くほど安堵^{あんど}していた。

問3 — 線①「今帰ったらもう二度とここへくる気にはなれないような気もした」とありますが、どうしてだと考えられますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 新人賞を受賞し今や有名作家として忙しく働^{いそ}ぎ始めた自分には、田舎^{いなか}の商店街の本屋を訪^{おも}ねる時間の余裕^{よゆう}など無くなってしまうと思ったから。

2 十一年前同様眠ったように商店街にたたずむミツザワ書店は、次に実家に帰ってきた時にはいよいよ店をたたんでしまっているだろうと思ったから。

3 新人賞の受賞をきっかけに親戚が詰めかける実家にうんざりしてしまった自分には、もう二度と地元に戻ってくる機会が訪れないことを予感していたから。

4 小説のすばらしさに気づくとともに、罪悪感^{ともしな}を伴う思い出につながるミツザワ書店には、新人賞をとったというきっかけでもないと思^{おも}われる勇気が出ないと思^{おも}ったから。

問4 — 線②「頬をはられたような気持ち」とありますが、どういう気持ちですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 人の命にかかわる話題にもかかわらず笑みを含んだまま話す女性に対し、強い憤^{いきどお}りを感じている。

2 もう少しミツザワ書店を訪れるのが早ければ直接店主に会えたことを知り、深く後悔^{こうかい}している。

3 店主の老婆がすでに亡くなっているという想定もしていなかった事実を知り、ひどく驚いている。

4 わざわざ東京から出向いたのに目的が果たせないということがわかり、心の底から落胆^{らくたん}している。

問5 — 線③「何か、とてつもない失敗をしかしたような気になった」とありますが、ここでの「失敗」にあたることとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 自分が若いころにミツザワ書店から本を盗^{ぬす}んでしまったこと。

2 店主が亡くなってから過去の過^{あやま}ちについて謝罪^{しやま}しにきたこと。

3 正月に一人でゆつくり過ごしている女性の邪魔^{じゃま}をしたこと。

4 店の人気がないという女性にとって避けたい話題^{わだい}を振^ふったこと。

問6 ——線④「茶封筒から自分の単行本をすばやく抜き取り、塔になった本の一番上にそっと置いた」とありますが、このときの「ぼく」の気持ちとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 本を読むことによって立ち現れる新しい世界との出会いを作ってくれたミツザワ書店に恩返しをしたいという気持ちと、いつか自分の書いた本が他の誰かの新しい世界との出会いを作ってほしいとかすかに期待する気持ち。

2 自分が通っていた頃とほとんど変わらないまま残っているミツザワ書店を懐かしむ気持ちと、自分が書いた本が少しでも多くの人の目に留まって作家としての自分の知名度を上げたといひそかにたくらむ気持ち。

3 子どもの頃大好きな場所だったミツザワ書店に自分の書いた本が置かれて誇らしい気持ちと、ミツザワ書店に元々置かれている他の本と比べるとまだまだ未熟で不釣り合いな本の出来にばつが悪い気持ち。

4 商店街の衰退とともに閉店が決まってしまったミツザワ書店を惜しむ気持ちと、作家としてなかなか芽が出ない自分の単行本を、せめて他の本と並べて置くことによってつかの間の満足を得たいと思う気持ち。

問7 ——線⑤「世界に通じるちいさな扉」とありますが、「ぼく」がミツザワ書店をこのように表現したのはどうしてですか。それを説明した次の空らん にあてはまることばを文中から二十字でぬき出して答えなさい。

「ぼく」にとって本は店主同様 であるから。

問8 ——線⑥「書き初めに向かう子どものような気分」とありますが、どういう気持ちですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 ずっと抱え続けてきた罪を告白したことで、心の重荷から解放され心機一転仕事をがんばっていいこうとする気持ち。

2 ミツザワ書店が近々営業を再開するのを知って、書店で販売するのにふさわしい作品を書き続けようとする気持ち。

3 昔からほとんど変わらないミツザワ書店の姿に感化され、迷わず自分の良いと思った作風を貫こうとする気持ち。

4 小説家になろうと思った原点に立ち返ったことで、自分の思いを改めて意識し前向きにやりとげようとする気持ち。

問9 本文の内容としてふさわしくないものを次から二つ選び、番号で答えなさい。

- 1 十一年ぶりに訪れたミツザワ書店は以前と変わらずシャッターが閉まっていた。
- 2 ミツザワ書店の裏の住居のインターホンを鳴らしたとき、出て来たのは店主の孫であった。
- 3 ミツザワ書店の店主が亡くなってから、まだ丸一年も経^たっていない。
- 4 ミツザワ書店から万引きをして、のちに代金を払^{はら}いに来たのは「ぼく」だけではなかった。
- 5 店主の孫とともにミツザワ書店に入ったとき、「ぼく」の記憶と全く同じ光景が広がっていた。

6 店主の孫は、ミツザワ書店をゆくゆくは図書館のような場所にしたいと考えている。

問10 この文章の表現に関する説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 さまざまな人物の視点を持つ語り手が物語ること、一つの事実を多角的な視点で眺めながら読むことができるようになっていく。
- 2 事実を客観的に描^{びやうしや}写する主人公の語りで物語が進行していくため、人物の心情は読者が補って読むようになっていく。
- 3 現在の場面と過去の回想をはっきりと書き分けることで、過去の事実と現在の状^{じやうきやう}況の因果関係が読者に伝わりやすくなっている。
- 4 物語に最後の一文を加えることによって、物語に余韻^{よゐん}を持たせるとともに、読者がその意味を想像しながら読む余地を残している。

3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

空の鯉 金子みすず

お池の鯉よ、なぜ跳ねる。

あの青空を泳いでる、

大きな鯉になりたいか。

大きな鯉は、今日ばかり、

明日はおろして、しまわれる。

はかない事をのぞむより、

跳ねて、あがつて、ふりかえれ。

おまえの池の水底に、

あれはお空のうろこ雲。

おまえも雲の上をゆく、

空の鯉だよ、知らないか。

問1 この詩の形式として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号を答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|
| 1 | 口語自由詩 | 2 | 口語定型詩 | 3 | 文語自由詩 | 4 | 文語定型詩 |
|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|

問2 この詩はいつごろの時季をよんだものですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|
| 1 | 一月 | 2 | 三月 | 3 | 五月 | 4 | 十月 |
|---|----|---|----|---|----|---|----|

問3 この詩の表現の特徴として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 体言止めが用いられており、リズムをととのえる工夫がされている。
- 2 隠喩法が用いられており、鯉に同情をもちながら、悲しい未来を暗示している。
- 3 擬人法が用いられており、鯉に呼びかけたり、敬語を使ったりしている。
- 4 表現技法がまったく使われておらず、子どもにもわかりやすく書かれている。

問4 ——線「はかない事をのぞむ」とありますが、それはどんなのぞみですか。十字以上十五字以内で答えなさい。

問5 この詩の語り手が、池の鯉にむかって伝えようとしているのはどんなことですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自分にできることとできないことを正しく見きわめ、無理なねがいはあきらめる方が幸せに近づけるということ。
- 2 目の前にあるわかりやすい目標にとびつくのではなく、自分が得意とする分野で思い切って挑戦すべきだということ。
- 3 自分では気づいていないと思うが、自分は今のままで十分立派なのだということに気づいてほしいということ。
- 4 おなじ物事でも、それをどんなことばで表すか、という表現のしかたしだいで、不幸を幸福に変えられるということ。

4 次の各問いに答えなさい。

問1 次の各文の——線のカタカナを漢字で書きなさい。

- 1 このことばの意味については二つの辞書の間にイドウはない。
- 2 高校生としての学問をオサめた。
- 3 我が社の人材データにAさんがいるかどうか、ショウウカイする。
- 4 彼が社会で生活できるようコウセイさせた。
- 5 故人のイシをついで、会社の運営をする。

問2 次の①～⑤の空らんにはそれぞれ同じ漢字が入ります。例を参考にして、その漢字の部首

名をひらがなで答えなさい。

例：資□、起□、電□、根□

源 ↓ (答え) さんずい

- | | | | | |
|---|-----|-----|-----|----|
| ① | □場、 | □報、 | □告、 | □域 |
| ② | □分、 | □長、 | 幹□、 | 細□ |
| ③ | 創□、 | 再□、 | □物、 | □設 |
| ④ | □白、 | □港、 | 天□、 | 真□ |
| ⑤ | □点、 | □口、 | 便□、 | 金□ |

